

「笹川杯作文コンクール 2015-感知日本-」 ～日本語で応募～



公益財団法人日本科学協会
業務部 国際交流チーム

目 次

★優 勝

奚相昀（合肥学院）	2
王喆琦（南京郵電大学）	3

★二等賞

章盈盈（山東大学〈威海〉翻譯学院）	4
俞熠麗（同濟大学）	5

★三等賞

鄭璐瑶（北京第二外国語学院）	7
劉密密（上海理工大学）	8
李華傑（大連民族大学）	9

★優秀賞

朱顏姍（首都師範大学）	10
郭慶玄（天津外国語大学）	11
王宝林（上海師範大学）	12
霍耀林（井岡山大学外国語学院）	14
何珊（南開大学）	15
趙千慧（鄭州大学外語学院）	16
宋改華（山西財經大学）	17
黃倩倩（合肥学院）	18
王 喆（華東師範大学）	19
王宝玲（東華大学）	21

★優勝

「船」

奚相昀（合肥学院）



18時30分、つくえの上には、中日の歴史と交流を描いた『日本史図説』が1冊。

「この本をちゃんと読んで来てくださいね」と先生の話を中心に留めておいたのに、いつの間にか睡魔に襲われ、眠りについてしまった。目が覚めるとそこには、一面に広がる海があった。

東の空が白んできて、日の光がかすかに伝わってくる。まるで龍の鱗のような銀色の水面がゆらゆらと揺られており、けして近くとは言えない所から1艘の大きな船が私の方にゆるりと近づいてきた。よほど酷い嵐の洗礼を受けてきたのだろう。見るからに船体はぼろぼろであり、航行するのもやつのようだ。船室で10人程度の沙弥のような人がおり、甲板では官服を着た2人が何かを話していた。私は「あれー、なんだかこの中の1人をどこかで見たような感じがする…そうだ、本で見た小野妹子じゃないかまさか607年に戻ってしまったのだろうか。向こうは、あれは遣隋使の船？だからもう1人は通事としての鞍作福利かなあ」と思っているところに、遣隋使が持っていた1通の紙が目に入った。その中を覗き込むと、「日出處天子致書日没處天子無恙云云」という文字が見えた。私は、その文字がなんなのか考え、国書だと気がついた時、その文字に吸い込まれるように、闇の奥底に深く沈んだ。気がついた時、次第に目の前が明るくなっていき、闇夜に光る月が目の前に姿を現した。

また海だ。そしてまた船が見える。今度の船は小さいし、脆そうである。窓から垣間見える船室には仏教の経典や医学書が多く溢れている。舳先は僧侶の格好をした60歳ほどの男性が立っていた。しかしながらその時突然、激しい嵐が唸り、バケツを引っくり返したような雨が降ってきた。小船が嵐の中で揺られ、今にも転覆しそうで心配でならない。船員たちも不安から騒ぎ出した。しかし、先ほどの年齢60歳の男性は落ち着いて船員たちを指揮し、船を巧みに操作した。彼らは命からがらあるひとつの小島に漂着した。しかし嵐は弱まる気配を見せず、よりその激しさを増して彼らに襲いかかってくる。彼らは生米や、海水しか飲むことができないまま、14日間漂流した末に、ある南の島に接岸した。「あっ、思い出した。これは本に書かれていた鑑真の5回目の船の旅だ。残念ながら、今回も失敗に終わってしまったのであろう」と考え込んでいるうちに、辛い旅で失明した鑑真が帰途についたようだ。その時、突然、鑑真は私のそばに寄ってきた。先ほどの私の覗き見に気付いたようで、彼がゆっくり話し掛けてきたのだ。「中国と日本の縁は船から始まった。ある船には文字を積み込んだが、両国の宝物、仏教や文学の経典、優れた文化や制度もさまざまな船で運んで行き来する。ほら、君は今まさにその交流の船に乗っているじゃないか」と鑑真は言った。ふと周りを見てみると、いつの間にかわたしは豪華な船にいる。先の二つの船より頑丈で、綺麗である。船の中では、数え切れない人が中国語や日本語で話している。甲板で茶道を楽しむ中国人もいるし、舳先で『論語』を朗詠する日本人もいる。船室ではコミックマーケットが催されているようで、孫悟空、ドラえもんなど多種多様なキャラクター達を囲って人々の賑わいが見える。私がいるのは船の2階であり、そこは教室風のデザインで、中国語や日本語の授業を真剣に受けている人々がいる。

「覚えてるよ。時代が変わっても、嵐に遭っても前に進むという船の航程は止まらない。この船に多くの仲間が招かれるからこそ、歩めば歩むほど明るい未来が見える。」そうか、昔、あんな苦しい環境にいても、みんなは中日の交流を断念せずに遠くにある光を見ながら、一步一步、歩いていた。今の時代にいる私たちもこのことを忘れず、たとえ途中様々なことに躓かれても、中日の交流に力を入れるべきだと思う。日本語の勉強をきっかけに、私はこの船の一員となった。そしてこれからより多くの「仲間」たちが増えていくと信じている。

船が進む方向に沿って見ると、地平線から日の出が少しずつ上がり始め、みるみるうちに一面を照らし出した。私はその眩しさに気が遠くなってしまった…

「あら、また眠っちゃった」

「風立ちぬ、いざ生きめやも」

王喆琦（南京郵電大学）



「良いか日本の少年よ、飛行機は戦争の道具でも金儲けの手立てでもない。飛行機は美しい夢だ」世界的飛行機設計者プローンが希望に溢れ、目をキラキラと輝かして二郎にこう言った。

これは宮崎駿が監督した映画『風立ちぬ』の一シーンだ。

飛行機を作りたいという夢を追い続けている一人の青年二郎は、機銃を載せた殺人マシンを作りたいわけではない。青年の夢の中では、限りなく広がっていく緑の畑が風に揺れ動き、白い雲の隙間から差し込んでくる日差しがゆっくりと飛んでいる飛行機の表面に映る。自然の壮大さと人類の創造力がこんなに完璧の一つになれるものかと感心させられる。しかし、青年が力を尽くして作り上げた零戦は戦争に使われるだけに、美しいはおろか、今、人々の心の中では醜い死神のようなものだ。そして二郎も殺人マシンを作った張本人として世間に批判された。

二郎の夢を壊す戦争は嫌いだ。しかし、結局、戦争に使った零戦だけれども、二郎が戦争の中でもひたすら夢を追いながら頑張っている姿を見ていくため美しく見える。

二郎は私に、ある日本人の先生のことを思い出させた。

日本語が好きで、日本語科に入ることができて何よりも嬉しかった。だから初めて日本人の先生の授業を受けた時、ドキドキしてやまなかった。五十音図さえ読めなかった私は授業後、その先生に変な発音で「日本語、大好き」と言った時、先生の溢れんばかりの笑顔と緊張して頬が真っ赤になった自分を今も昨日のことに覚えている。いつも親切に教えてくれる優しい先生で、皆に愛されていた。しかしある日、先生と街を歩いていた時、ある店の前に真っ赤な字で「日本人禁止」と書いてある大きな看板が置かれていた。看板が大きくて、見て見ぬふりをする事さえできなかった。先生は一つため息をつき、苦笑いとともに漏らしたのは「ちょっと、寂しいよね」という一言だった。先生はとても明るい人で、授業中よく皆を笑わせながら知識を教えてくださいました。普段の先生なら絶対言わないようなことで、私はまるで自分が言われたように胸が痛かった。

日中戦争が原因で、日本人なら誰でも悪い人と思い込んでいる人は決して少なくない。しかし、実際にその人と付き合ってみないと、実際に二郎の夢の中の美しい風景を覗いてみないと、本当のことは分からないと思う。先生は二郎のように、一人の人間として夢を追っている。そしてそのことの後も相変わらず元気いっぱいに教育に励んでいた。これからもずっと、先生というより、友人として長く付き合っていくだろう。

流されず、諦めずに夢を追いながら生きていくことこそ、どんな時代でも一番大切なことだと私は思う。それとともに、今日の日中関係の緊張状態を解く鍵はこの一人ひとりの付き合いの中にあることもしみじみ感じた。

2年生の時、日本から来たギタープレイヤーのライブの通訳を務めたことがある。曲と曲の間に、彼が自分の話を言い始めた。2011年東日本大震災の間中国でツアーをやっていた。電話は通じない、家族の安否もわからない、帰りたくとも帰れない大変な時期だった。そんな時でも、わざわざ自分の音楽を聞きに来る人々のことを考えて、ツアーを中断しなかった。思いもよらなかったことに、ライブ中、客と一緒に不慣れた日本語で「頑張って」「諦めないで」と大声で異国の地で不安と寂しさに襲われる自分を力づけてくれた。それで、4年ぶりの中国で、みなさんに感謝の気持ちを伝えたいという。この話を聞いて私は声が少し震えた。

「上を向いて歩こう」という次の曲の中で、大地震の恐ろしさを痛感したことのある人々の心がひとつになったような気がした。そして、媒介としてお互いの心を通わせることの出来る一人の通訳者として何が出来るかもしみじみわかった。

一人ひとりが自身から芽生えた意識を元に行動するのが大切だと思う。そして、全体としてどんな些細な努力であっても周りの人間に大きな影響を及ぼすことができる。

日本語教育に励んでいる先生でも、音楽家を励ましたお客さんたちでも、感謝の気持ちを曲に込めた音楽家でも、そして、飛行機を研究する二郎でも、皆は何かしらの夢を持ち、情熱を注ぐ。時代の中で小さな存在であると同時に大きな存在とも言えよう。

風立ちぬ。しかし、大事なのは風向きではないと思う。激しい風の中でも自分の向く方向変えないことだ。

★二等賞

「交流も力になる」

章盈盈（山東大学〈威海〉翻訳学院）



2012年の夏、私は高校を卒業し、山東大学に入学した。その日、父が言ったことはいまだに記憶に新しい。

「どこでも構わないが、よりによって日本語を勉強するなんて…」

それまでの経験から、確かに父は日本が嫌いだということが分かっていた。「日本産の製品は使うな」と言ったり、家族と食事をする時に日本を非難したりしていた。そういう頑固な態度を叔母に批判されると、すぐ激しく反論していた。理由は戦争のドラマなどから得た知識だった。だから、自分の娘が日本語科に入ると聞いた瞬間、彼が驚いて失望したとは意外ではなかった。

2年生の時、私は日本へ留学に行った。数ヶ月後に父から電話がかかってきた。彼はくすくす笑いながらこう言った。

「まあ、自分でも考えつかなかったが、この間、日産の車を買うことに決まったぞ。」

「ええ？本当ですか」

「本当だ。それに、まもなく同僚と慰安旅行で日本に行くよ。そこで君と落ち合うこともできるかも」まるで別人のようになっていた。

父の変化は、叔母たちとの間でもよく話題になっている。しかし、今の父は日本に行った経験があるから、決してそのことで彼女たちと口論はしない。どうして父は変わったのだろう。

私はいつも電話で、日本で楽しい留学生生活を彼に話していた。日本人の学生が私のために誕生日パーティーを開いてくれたことや、秋に公園で先生や学生たちと芋煮会をしたこと、ボランティアとして当地の小学校で子供たちと遊んだことなどだ。そのようなことを聞いて、彼は落ち着いて日本のことを考え、理解できるようになったのだろう。父の変化を見ていると、中日関係のことが頭に浮かんでくる。

最近、中日関係は以前ほど緊迫していない。だが、それは必ずしもよくなったというわけではない。

中国のBBSでも、日本の2chでも、人々は自分の同胞と一緒に相手の国を非難している。どんな話題でも、相手を罵倒することが一番大事だと思っているような人が少なくない。だが、そういう人の中に、相手の国の言葉が理解できる人は少なく、相手の国に行ったことがない人が最も多い。本すら読まず、ネットのニュースばかり見て安易な固定観念にとらわれ、大げさにまくし立てている。

以前の父は、故郷から出ることがほとんどなく、外の世界と交流する必要はなかった。今でもそのような人は少なくない。しかし今日では、グローバル化が進んで、中国も急速に発展している。誰でも冷静に外の世界と理解し合うことが必要になってきた。六世紀、唐の時代の中国では、民衆は漢民族以外の文化を受け入れ、日本人は中国に渡って文化などを学んでいる。交通と通信が不便だった時でも、文化の交流が滞っていない。だから、インターネットが目覚しく発展している現在、私たちが異文化と交流することを拒む理由はない。交流しなければ、理解し合うことができない。理解し合うことができないならば、お互いに正しく批判することもできないだろう。

幸い、外交関係はそれほどよくななくても、ネットの悪口は多くても、本当の民間交流が盛んになっている。

日本へ旅行に行く中国人も多くなってきた。彼らは日本から学ぶことを見つけたからだ。例えば、私の父はわざわざ日本に行って、私に会ってから様々な物を買って帰国した。今は日産の車を運転して、時々ソニーのイヤホーンを使っている。それと同時に、中国でも経済の発展に伴って様々な活動が行われ、日本人の客を呼び込んでいる。去年、威海で世界ロングディスタンストライアスロン大会が開催された。クラスメートにもボランティアで手伝った人が二人いた。彼らの話によると、日本人の観客も少なくなかったようだ。

一人の旅行客がしていることは、ただ旅を楽しむということだけである。しかし、多くの人々がそうすれば、新たな力となって政治にも影響を与えることができる。彼らが皆礼儀を守って、相手が皆丁寧に受け入れれば、お互いに対する印象も変わってくるかもしれない。私の父に起こった変化は偶然ではなく、珍しいことでもない。私のような外国語学習者が皆、周りの人にそういう影響を与えていけば、どんな街にも異国のことを理解できる家ができるだろう。それらの「家」と「家」がお互いに理解するようにすれば、「国」と「国」関係もよくなっていくだろう。

私は将来、中日貿易関係の会社で働きたい。その仕事も民間交流によって支えられている。そのため、貿易相手の日本人に優しい中国人の姿を見せ、異文化と交流する道を探しながら、自分なりの努力を続けなければならない。小さな流れも大河となるというように、誰でも積極的に交流すれば、新しい世界もそこから始まるだろう。私はそう信じて、未来の希望に燃えている。

「友好の隣人になれ」

俞熠麗（同済大学）



中国の新聞やマスコミで、中日関係と言えば、かならず「一衣帯水」という言葉が出てくる。この言葉は文字通り、帯のような狭い川のことで、とても近いという意味だ。

確かに地図から見れば、中国と日本の距離はとても近い。私が住んでいる上海から日本の成田空港まで、飛行機でただ二時間半かかるだけで、もし北京へ行くなら飛行機で二時間、高速電車で五時間もかかる。そういう点から見ると、中国と日本はたしかに「隣人」だ。

位置が近い上に文化も近い。小学校二年生の時、叔母さんの家で日本の化粧品を見た。その化粧品の瓶には日本語の説明がついていた。漢字を使っているのだから、当時の私でも読める。そして、あの時の私には、日本は中国と同じ漢字を使う国だという印象が強く残った。それはとても交流には便利なことである。

日本人の留学生との交流会で、もし言いたいことがうまく伝わらない時、漢字で書くと、相手は大体わかる。また、お互いの名前を読むとき、欧米人だと英語の発音を真似するか、お互いの国の流儀で名前を作らなければならないが、中国と日本の間では、両国のそれぞれの漢字の発音によって直接お互いの名前を呼べばいい。そして、日本語の音読みは中国語の読み方に似ているので、英語より覚えやすいと思う。漢字は天然の中日の架け橋で、また、文化が繋がっている証拠だ。

漢字だけではなく、ほかにも似ているところはたくさんある。留学生と交流した後、「三国演義」、「西遊記」などの中国の古い小説が、日本で多くの人に読まれていると知って驚いた。留学生の中に「三国演義」が凄く好きな人がいる。彼女が一番好きな人物は趙雲だ。私と話す時、彼女は趙雲についていろいろ話したが、その詳しさには本当にびっくりした。実は、私は「三国演義」はきちんと読んでいないから、彼女のようになんか詳しくはない。中国人として恥ずかしいことだ。

漢字や古い小説の知識を共有しているのは、昔の中日交流の結果である。現在ではどうであろうか。今、20代、30代になる若者達は、小さい頃から日本のアニメを見て成長してきた。私が小学生の時、テレビで午後五時から必ず日本のアニメが放送されていた。「テレビを見るのは宿題を済ませてから」というのが母の要求だから、私は早くアニメが見られるように、学校でいつも昼休みや、授業が終わったあとの10分休みを利用して宿題を終わらせた。「ポケモン」、「デジモン」、「ドラゴンボール」などのアニメは、私にとって幼少時代のとても大切な思い出だ。

私はあの時から今までずっとアニメを見ている。アニメによって、日本に強い興味を持つようになった。高校三年生の時、大学の志望を決めたが、日本のことをもっと知りたいという気持ちから、日本語科を第一志望として選んだ。周りの友達は私が日本語科の学生になったと知ると、必ず、「じゃ、今字幕を見ないで、アニメの日本語が分かる？」と質問する。それは、まだ私には難しいことだが。また、時々高校のクラスメートから小説やビデオなどの翻訳を頼まれる。これらは私が日本語を習う動力の一つになっている。

アニメやドラマから日本に興味を持つ若者は決して少なくない。また、その中で多く的人是はインターネットで日本語を独学している。日本語を独学する人のためのウェブサイトも多く、五十音図を教えるビデオはとても流行っている。これは中日民間交流のよいベースになると思う。

これからは私達若者の時代だ。中国の若者として、また日本語科の学生として、具体的に中日民間交流で何をすればいいであろうか。多分、直接の交流が一番いい方法ではないかと思う。

ある留学生の友達が私に次のように言った。「上海に行く前、テレビで中国の悪いニュースばかり見たから親が凄く心配したんだけど、でも上海で二か月ほど住んでみたらテレビのニュースと全然違う」。彼女の話は私に直接交流の重要性を認識させた。中国のマスコミも日本については良いニュースより悪いニュースの方が多く、いろいろな誤解を招いている。誤解を解くためには直接交流が一番便利な方法だと思う。私は今日本語クラブの一員で、部長は私のクラスメートだ。私達は全学校合同の中日交流会を行うつもりだ。ま

た、毎週木曜日必ず小さな交流会を開いている。それは日本に興味がある中国人と、中国に興味がある日本人の直接交流の機会を増やすためだ。こうした活動から理解や友情も深まるように思う。

中国と日本は隣国である、たとえ、両国の政治上の矛盾がたくさんあるとしても、一般市民の私達は友好交流ができる。中国には「遠親は近隣に如かず」という言葉がある。日本語では「遠い親戚より近くの他人」と言う。今後、私も日本語科の同級生と一緒にもっと交流会を行い、中日民間交流の小さな力となることを願っている。いつかきっと、中国と日本は真の友好ある隣人となることを信じている。

★三等賞

「草の根の力を発揮しろ」

鄭璐瑶（北京第二外国語学院）



梅の蕾が次々と咲き始め、暖くなった風も春のメッセージを届けてきた。春の時期になると、気持ちも軽くなり、体も動きやすくなる。

私はこの間、バイトとして通訳をやった。中国のある教育会社が日本の広島国際大学と福祉や医療分野で業務提携を行いたいとして、私のところに連絡があり、通訳の担当を依頼して来たのだ。

「生半可」な自分でいいのかなと迷っていたが、引き受けた。なぜかという、人生初の通訳関連の仕事だから、このチャンスを逃したら、二度と来ないと思ったからだ。

「思い立ったが吉日」というようなことだ。自分はきちんと気持ちを引き締めて、準備を万全にした。おかげで、無事に任務を完了したとともに、教育会社のトップリーダーたちに褒められて、ウェーチャットの友達にもなった。その日、日本から来たNPO法人世界の理事長ともいい関係を築くことができた。中国の中央対外連絡部の官僚たちも来たので、名刺をもらった上に、一緒に食事をした。話をしたら、官僚の一人がなんか二外の学生で、私の大先輩だ。私は、「自分も中日の美しい未来を構築するために、精一杯の力を尽くしたいです」と先輩に話し、先輩は「夢を実現させるよう頑張ってください」と励ましてくれた。

なんか「犬も歩けば棒にあたる」という感じがした。その仕事を受けなかったら、自分の世界はこれほど広げられなかったであろう。人と人はかならずなにかの「因縁」によって知り合い、そのうち段々親睦になるものではないか。中日の民間交流も同じだと思う。深く接触した上で、評価を出すのが正しい。偏見や差別は必ず現実に基づいたものではない。しいて言えば、最初にその「現実」を作ったのは故人たちで、きっと今の時代を生きる人々ではないのだ。時代が進むにつれ、賢明な人は「今の現実」を重視し、「今の現実」をよりよくするために絶えず努力していく。その「今の現実」はなにかというと、きっと「友好」「一致団結」「ウィンウィン」「親睦」などといったことであろう。民間交流はいわば、「草の根の交流」と呼ばれるが、国民の力はまさに草の根のようなもので、冬に静かに命の種を孕み、力を溜めて春になったら、一気にその力を発揮して、元気はつらつと土を破り、成長していく。両国の未来を担うのは、青年たちである。従い、青少年の交流はきわめて重要な立場に位置している。

私はこの間日本舞踊を稽古している日本人の女の子と知り合った。その子は今中国で、半年間の交流生活をしているそうだ。その子は茶道具や習字の筆や踊りの扇子を買いたいと言うので、彼女を連れて「後海」に行った。ある中国風の店で茶器を選んだとき、店主さんがとても親切で、日本から来た客人だと聞いて、

取って置き「茶王」と呼ばれるとてもいい香りのしたお茶を入れてくれた。それに、いろいろなお茶についての豆知識を教えてくれた。「お茶の職人だなあ」と感心した。店主さんはもともと清華大学の学生で、卒業したら、中国の伝統文化を発揚したいとして、店を開いたそうだ。多種多様な茶器があり、鶴や梅の花、竹、ランなどたくさんの模様がある。中には『清明上河図』の描かれた茶器もある。それはとても上手にできていた。店主さんは、できるだけ多くの外国人のお客さんに中国の伝統文化の底力を知ってもらいたいと語り、私たちは感服した。中国の夢を持つ立派な店主さんだね！

その女の子も「私も中国文化を出来るだけ多く深く理解したい。私は師匠に従い、日本舞踊を稽古しているから、将来自分もその道を歩むつもりだ。日本の伝統芸術をいかに守るか、発展させるか、より多くの外国文化の要素を日本舞踊に入りたい。古き良き芸に新しい近代文明の芳しさを加味して、日本舞踊をより粋の集まった芸術に発展させていきたい」と話してくれた。彼女が話しているとき、私は彼女の目から堅実な信念の光を見た。彼女の言葉を深く心に刻み、自分もなんか心から力が湧いてきた。「将来、日本舞踊家になって舞台に立ったら、ぜひそのとき、私の演出を見に来てください」と真摯に私を誘ってくれた。私は「はい。その日のために、稽古を頑張りなさい」と約束を交わした。きっと、立派な舞踊家になると私は信じている。

中日両国は「金蘭の交」「竹馬の友」みたいな関係で、決して「遠交近攻」「犬猿の仲」のような関係ではないのだ。せめて、この世代の若者たちにこの点を理解してほしいと思う。両国のよりよい明日を構築するために、われわれ青年たちは何をすべきか、何が出来るか、中日友好のために身を投じている諸先輩方の足跡を追い、先人の事業を守り、後に来るものにより広い天地を与えることができればいいのではないだろうか。「願わくは、草の根の力、発揮しろ！」

「一寸ばかりの思いやり」

劉密密（上海理工大学）



皆さん、一寸という言葉を知ったら、何を思い出すのでしょうか。一寸の光陰、一寸の虫、一寸法師などなど、答えはまちまちに違いません。しかし、一寸ばかりの思いやりを知ったことがありますか。たぶんないと思います。

ある日のことです。日本の姉妹校から交流団がやってきました。私は田中千理さんという方の案内役を担当することになりました。日本のお客さんが来たら、豫園、バンド、新天地への見学が定番となりました。バンドの素晴らしい夜景を彼女に見せたいので、翌日、バンドへ行く約束をしました。

ゴールデン・ウィークなので地下鉄の混雑を考慮して、二人はいつもより早めに出ました。でも、地下鉄に着いたら、もう目眩しいほどの長蛇の列です。ラッシュだから、人が多くて、とても騒々しい。視線の及ぶところ全部人間の波です。私たちは人の流れに揉まれて、ようやくホームに入り、行列の後ろに並びました。その後、わたしのうしろはプリーフケースを持っておじさんが並んでいました。彼は時々時計を見て、急ぎ事でもあるかのようです。とうとう電車が来ました。みんなは我先に電車に乗るために、列が一瞬で崩れてしまいました。後ろの人に押されながら、私と千理ちゃんが電車に押し込まれました。後ろにいるあのおじさんも無理矢理に乗り込もうとした。でも、車内はすでに缶詰なので無理です。彼は諦めずに額の汗を拭きながら、もう一度チャレンジした。やはり無理だった。見る見るうちにドアが閉まろうとした。「あの、

私たち、もう少し奥へ詰めましょう」と、千理ちゃんは私を引っ張って言いました。私はいいやいやながら手に下げたハンドバッグを胸に抱えることにして、一本の木のようにまっすぐ立たされました。おじさんはちょっとした隙を見て辛うじて電車に入り込みました。

ぎゅう詰めの地下鉄を出てようやく開放されました。千理ちゃんとまた先のおじさんのことを話し始めました。「あのおじさん、いやだわ。次の電車に乗ればいいんじゃない。私、知らない人と顔を付き合わせるのがいやだわ」と文句をもらした。千理ちゃんは微笑みながらこう話した。「そうだわ。まったく知らない人だからね。でも、あのおじさんは急用があるかもしれません。思いやりの心をもって一寸だけ譲っただけであのおじさんは電車に乗れました。だれにでもいつか急用があるではないでしょうか」。千理ちゃんの優しい考えに返す言葉を失いました。

今回の民間交流を通して、譲り合うことの大切さを改めて考えさせられました。今の社会ではもっとも足りないのはこの一寸ばかりの思いやりではないでしょうか。あの先哲である孟子の教えには辞讓之心、礼之端也というのがあります。つまり、譲り合う心は礼の始まりだという意味です。思うに今日の中日関係についても同じことが言えるのではないのでしょうか。自国の都合だけではなく、常に譲り合う心、つまり、一寸ばかりの思いやりを持つことが何より大切です。

「民間交流と中日関係」

李華傑（大連民族大学）



未来さん、こんばんは。まず自己紹介をいたします。私は李華傑と申します。中国の大学二年生です。今、寮で未来さんに手紙を書いております。君はきっと未来で私たちを待っているでしょう。

「未来さんはどんな外見ですか？ 性格は？」。質問はたくさんありますが、誰も答えてくれませんでした。でもそれは当然ですよ。誰も未来さんに会うことができませんから。

けれど、一つの事実は分かっています。それは未来さんが今後どうなるかは、私たちが何をやるかの結果だということです。実はみんな知っています。けど、未来さんのためにずっと頑張れる人は少ないです。本当に残念です。

私は大学に入る前に、日本と日本語に触れる機会は本当に少なかったです。宮崎駿監督の映画を除いて、何もないです。しかし日本語科の学生になりました。不思議ですが、これは運命かもしれません。ならば、私は日中両方の立場で考えなければならないと思います。日中関係がよくなるには、政府も民間も努力しないとイケないと思います。でも状況はそんなによくないです。

1972年に日中国交正常化が実現しましたが、終わったばかりの戦争を忘れることはできませんでした。それから、靖国神社を参拝した首相がいました。尖閣諸島についての所有権とか、戦争法案とか、これらは中国人にとって困った問題です。政府間の交流は、だから多くないのです。日中関係が良くなるようには思えないです。

一方、民間でも問題があります。私の祖母は、今も私の専門が日本語ということを理解できません。祖母を訪問すると「なぜ日本語を専門に選んだか。卒業すると仕事を探しやすいからか」と、不満げな質問がどんどん来ます。理由は知っています。祖母は昔、日本軍に殺されかけました。私が「例えば隣近所と剣かし

て、大人たちはお互いに憎んでいるとしても、子供たちは一緒に楽しく遊ぶべきではありませんか」といくら説明しても、祖母は頑固な態度を崩しません。本当に仕方がありませんね。

未来さんはこうした状況を見ると、きっと悲しいでしょう。前途多難ですね。2つの国の政府は意見が一致しないし、民間では祖母みたいな人間が少なくないです。どうしたらいいのでしょうか。私はいい面を探してみたいです。

まず、日中間の貿易額は増えるばかりです。つまり日中はもう経済共同体で、お互いに離れられませんから、戦争の可能性も低くなりました。そして経済の発展によってお互いの文化も知るようになりました。特に日本のアニメは中国でとても人気があります。お互いの理解が深まりました。もっとも重要なのは人間です。私のように平和な未来を願う人がだんだん多くなって、祖母のような頑固な人は少なくなっています。隣近所なんだから、ちゃんと付き合わないといけないでしょう。

未来さん、私はまだ日本に行ったことがありませんから、これはただ、中国人として、中国人の立場からの意見です。日本からの立場はまだ分かりません。ごめんなさい。

でも私は頑張ります。日中友好は私にとって、両国の政府と国民にとって、全世界にとっていいことです。ですから、両国の平和な未来を担う青年として、必死に日本語を勉強して、私は必ず頑張ります。

もうこんな遅い時間になってしまいました。今日はこれで終わりにしましょう。眠すぎますなあ。夢を見るときに、未来さんに会えればいいですね。ではおやすみなさい。

★優秀賞

「若者共感者からの希望」

朱顔姍（首都師範大学）



「時代に最も敏感なバロメーターは青年である」。フランスの思想家であるロマン・ロランがそう言ったことがある。若い世代は柔軟な発想と行動力を持っており、若者は元気で友好的な社会関係をつくる原動力だ。日中関係を新たな成長に導くには、彼らの力が欠かせないが、その第一歩は両国の間に多くの共感者をつくり出すことであると私は思う。

共感者とは、人の行動や思想などに深く同感しながら、お互いの違いを尊重する人のことをいう。日中交流の共感者になる前提条件は、偏見を捨て去り、お互いに活発な意見交換を行った上で、より深い理解を求めるとのことだ。

2014年の2月、ボランティアとして、日本語ダイジェスト版『知日—なぜ中国人は、日本がすきなのか！—』の出版記念会に参加し、作家の毛丹青先生の談話を聞いた。その話では、「共感者の代表たる者は『知』の構築を日中両国の若者同士で是非ともやってほしい。政治は文化のひとつにすぎない。日中間の政治関係がよくないからといって、文化の交流までしないというのは間違っている」と強調されている。恐らく書籍出版の狙いは、外からの目線で、こびることもなく、けなすこともなく、等身大の感覚で日本の姿を見ている、そういうことを日本の国民に伝えたいだろう。また、政治問題があっても、文化全体を否定すべきではない意味も含まれているだろう。国と国との交流は個人間の交流に始まるものである以上、個人と個人との交流は相手を一方的に否定するのではなく、互いに共感と理解を深めることに意義が生まれるものだと思う。

時代に恵まれているし、インターネットが普及しているので、若者はいつでも最新情報を入手でき、それを糧に交流を深めることができる。こうした若い世代間での知識の伝播スピードは決して軽視できない。言葉が通じなくても、地域が異なっても、交流が簡単にできる。昔、私にとっての「日本」はただの抽象名詞だった。「一衣帯水」や「アニメ王国」などといったイメージしか浮かばなかったのだ。初めて日本の若者と出会ったのは高校一年生の時で、ある日中高校交流のプロジェクトがきっかけだった。「安部香央里」という女の子に出会ったが、私は日本語が分からなく、彼女も中国語ができなかったため、交流に支障があるかのように見えた。しかし、同じ年齢とアニメ好きなどの共通点があって、言葉に頼らなくても、一緒に笑い、一緒に悲しみ、そして一緒に喜びを分かち合え、心が通じ合っていた。今から考えれば、これも若者の一種の共感の力だと思える。

情報によって相手国の文化に対して関心を持つことが極めて大きな意味を持つ。顔と顔を合わせた交流のみならず、各種のニューメディアを使った交流も日増しにその重要さを表している。「塵も積もれば山となる」。次世代を担う青年交流は、様々な民間交流活動をより有機的に結びつけることを目指すことができる。日本学生支援機構(JASSO)の調査によると、現在日本在住の外国人留学生の中で、中国人留学生が全体の60%を占めているという。青年学者は若く、エネルギーに満ち溢れており、さまざまな活動を通して、日中民間交流の第一線で活躍している。こうした特徴を生かし、今後の民間交流では、共感者の力を利用した交流活動の有効利用についても積極的に行うべきだ。中国で日本の文化や生活に強い興味をもつ若者が増えているが、日本でも中国文化を知り尽くしたいような共感のできる若者が出てほしいという望みは、『知日』の著者が発したいメッセージではないか。

日中両国の共感者が増えて初めて、両国の友好関係が頑丈に築かれるものだ。両国の国交がまだ回復していない時代、当時の民間交流は日中友好の先駆けとなり、両国関係打開のために道を開いた。近年の両国関係が一層悪くなったように見えるが、決して打開策がないわけではない。理由や経緯などはともあれ、両国の共感者の人数が次第に多くなってきていることは事実であり、日中青年友好交流会やfree birdなどの若者主導の交流団体も「平和の橋」と呼ばれるほど大変な活躍ぶりを見せている。「一人では決して見ることのできない景色がある。では、一人ではないのなら、見えるかもしれない」という信念は共感者たちを支えている。共感者たちは両国の明るい未来を次から次へと届けている。

日本の大人気な林修さんの言葉を借りて私の気持ちを表したい。

「共感者、いつやるか。今でしょう！」

「民間交流と中日関係」

郭慶玄（天津外国語大学）



もし中日の間での民間交流がもっと頻繁になったら、私たちはもっと繋がられるだろうか？もし私たちはお互いにもっと分かり合えたら、中日関係はほんの少しだけでもよくなれるだろうか？これは大学三年生の私が常に頭に浮かび、考える問題である。ちょっと言いづらいだが、こんな私と日本という美しい国の絆を結んだのはアニメである。でも、人の口によく言われる御宅族ではない。日本に作られたアニメを見るたび、私はいつも深く感動される。それらアニメは、家族、友達、恋人、同僚などとの愛情をよく謳歌し、遠いかなたで暮らしている普通の日本の人々が作った愛情を見るたびに、胸がいっぱいになる。

中国には「紅樓夢」の作者である曹雪芹が言った「黄金万両が容易で、気心が知れた友達は手に入らない」という有名な言葉がある。中日両国本来も一衣帯水の隣国であり、それは私たちが切り捨てようとしても切り捨てられない大変得がたい絆である。言い換えると、それは私たちは気心が知れた友達という目標を達成するために、他の国よりもう一步先だということである。中国の茶芸と日本の茶道、中国の唐装と日本の和服、そして中国と日本が共用している漢字、それらの文化を見ると、「これは兄弟でなければなんだろう！」と思わず嘆いた。そんな私たちはただ普通の両国関係の枠を超え、もっと理解しやすく、もっと親しい友になれるはずではないだろうか？

このテーマを見たとき、私はすぐある日本人友達のことを思い出した。名古屋出身の「りほ」と言う女の子である。お互いに対象国の言葉を学ぶというきっかけで、先輩の紹介で知り合った日本人であり、私の最初の外国人の友達であった。そして、私とりほはそれぞれ日本語、中国語を学びあい、お互いに「先生」と気軽に呼んでいた。日本語だけではなく、日本の文化、風俗習慣、年中行事なども親切に教えてくれた。おかげさまで、日本に対する関心、興味が一層高くなった。私もできる限りの中国の事情を紹介して、伝統文化、歴史人物、おいしい食べ物、面白いゲームなどいつも興味深く聞いてもらった。

りほは典型的な日本人だと思う。いつも人に迷惑をかけないように、人の気持ちをよく心掛けている。たとえ何か悪いことがあったとしても何も言わずに済むタイプである。私は大学一年生から二年生まで、彼女は何回も帰国したことがある。天津に戻ったらいつも私も含めて何人の中国人の友達にプレゼントを持ってきた。消しゴムや鉛筆のような文房具、お菓子、アニメのフィギュア、グリーティングカードなどいろいろなお土産を連れて私たちにくれた。日本人にとってはこれは常識で些細なことかもしれないが、その中に込めた気持ちはいつも私の胸に深く刻んでいた。今年の2月、りほは名古屋に帰った。しかし、その二年間私達と一緒に笑ったり、悩んだりことはきっと一生も忘れられない思い出になると信じている。

私と日本人の友達の付き合いは取るに足らない話だが、これもは中日交流の一つの部分だと信じている。このような友情は中国、日本のどこでもよくあるごく普通のことだが、こんな普通のことこそ中日両国の長い間切り捨てない付き合いを築く欠くことできないのではないかと思う。事実が示したように、中国人でも日本人でも私たちは「草の根」と呼ばれる階層は心の底から両国の友好関係を願い、築いている。この文章を書くうち、一つ一つの文字を打ちながら、心が急に重くなって涙がそっとこぼれてしまった。

今は日本の大学院を目指している。将来のある日に、私とりほは日本の街で会えたら、あれはいい晴れた日だったらいいなあと祈っている。最後に、その星屑と太陽が共に輝く日が来る前に、私はいつまでもそこに祈りながら待っている！

「中日民間交流の重要性」

王宝林（上海師範大学）



日本のアニメは私の知っている日本のはじまり。さまざまな神様と妖怪たちの伝説、桜がひらひら舞い落ちる、古典的な和服、にぎやかな文化祭、美味しい料理、全てに興味を持っている。機会があればぜひ一度見に行きたい。こんなに優しいアニメを作っているから、人の心もきっと優しいだろうと思う。

しかし中日関係はずっと敏感な話題だ。私の出身は中国の内地、日本語の専攻を選んだ時、一部の知り合いは反対した、でも私は日本語を選んだ。大学で何度も日本についての活動に参加した。長崎婦

人代表団が来た時、いろいろな日本文化を紹介してもらい、とても面白いと思った。その時日本民間文化についてもっともっと知りたいと思った。

緊迫した両国の情勢は両国の経済と文化交流だけではなく、民衆の心にも敵視影響を与えている。日本右翼政府の教科書改訂事件、靖国神社の参拝事件、最近通った安倍政権の安保法案事件、ほかに国内外のいくつかの無責任なメディアのレポートなど、すべては民衆の不満を巻き起こした。歴史は、「鑑古思今」の意味です。戦争を繰り返してはいけません。両国の平和と発展のために、友好関係を促進しなければならない。

中国では「国の交わりは民見合い、民のお見合いは心に通じる」という言葉がある。国と歴史は、一つ一つの人を作るものだ。訪日、訪中の人全員中日交流の使者と推進者だ。ネットで愛国の名義で貶める発言が存在するが、日中両国の友好に関する世論調査では、中国の友達がない、中国に来たこともないの人は、中国が嫌いだと答えた。中国でも同じ、日本に行ったことがない、日本の友達もいないの人は日本が嫌いだと答えた。一方的な思想もメディアの報道や世論の影響が大きいと考える。

それでも、両国の友好のために頑張っている人が多い。

加藤紘一はずっと前から中国との友好交流を応援してきた。小泉元首相は靖国神社を参拝することに反対したため、右翼分子に彼の加藤歳兼事務所-精三会館を焼かれた。しかしこれは加藤さんの考えを変えることができなかった。加藤さんは両国の声をお互いに伝える、本当の日本や中国を知るために頑張っている。

矢野浩二さんは中国で俳優と司会者をしている、しかし釣魚島問題が彼の事業に影響した。矢野さんは「両国民間の日常交流の中で、一つ一つの個人を見る、国籍で分類するのはいけない、「あなたは日本人」「私は中国人」という話は、人と人の間疎遠になる」「中日両国の国民はすべて喜怒哀楽の感情があるので、きっとお互いに理解できるだろう」とお願いを込めた。

両国関係よくないの時こそ、両国の各界の人々が積極的に双方の民間交流を強化することが必要だ。両国関係の改善と発展の環境を作る必要がある。民間交流はこの環境が重要となる。

1998年中国で大水害が発生した、その時長崎県知事金子原二郎は率先して中国の被災者のために募金した。こんなに大勢の中国人は大変感動した。第二次世界大戦の時東北の日本人孤児は「中国の養父母の共同墓地」の前で涙を流した。日本で中国人留学生は日中友好交流の第一線で頑張っている。中国宋慶齡の基金会の主席胡启立と日本の元首相、訪問団団長の村山富市氏と中日両国の青少年たちは共に友情の木を植えて、今その桜とカイドウは深く根を下ろし、すくすくと成長している。中日の女性交流活動で、日本の女性が中国の友達に日本の茶道の魅力を展示し、中国の友人を試飲に誘った。その後の浴衣試着体験や特色の食べ物の展示ことも双方に深い印象を残した。2008年8月8日夜、北京オリンピックの開幕式の現場で、日本代表団の代表が日本国旗と中国国旗を手を持って入場したことは両方に記憶を残した……これらの温かさを感じさせるの報道は、代々日中友好が応援者の努力の結果で、主流の大衆の思想はいくつかのネットの過激な言論や狭隘な民族主義に打ち勝つ、友好、平和、発展こそみんなが望む結果だ。

中日双方は心から両方の文化を理解し、歴史を正視すれば、恨みはきっと薄くなる。もし誤解や憎しみだけが成長すれば、結局誰にも不利であろう。民間交流は中日友好の土台である。教育、観光、経済、スポーツなどの交流を促進しなければならない。共通点を求めて共同发展すべきである。抵抗はきっと強いだろうが、それでも、私は中日友好のために力を尽したい。

民間交流と中日関係

霍耀林（井岡山大学外国語学院）



その日の事故からもう何ヶ月か経った。足の痛みが日々の流れにつれてだんだん薄らいでいるが、その時に体験した人の心の温かさがまだ残っている。たぶん一生忘れられないだろう。

その日、私はいつものように自転車で学校に向かう途中、毎日必ず通る坂の下り道で転んだ。自分がわけも分らないうちに転んだ。自転車と一緒にぐるぐる回転し何メートルか先で止まった。その時、きりきりした全身の痛みのほか、私には何の意識もなかった。

「痛い！痛い！痛い！」激しい痛みで私は叫ばずにはいられなかった。すぐ、近くの全く知らない、日本人のお爺さんが私の声を聞いて、ばたばた走って家から出てきた。

地面の血。横たわった私。大声で叫ぶ私。歪んだ自転車。お爺さんはどういうことか、すぐ分かり、携帯で救急車を呼びながら、自宅に急いで駆けて戻った。間もなく、一人の頭髮の真白なお婆さんが、私のところによろよろして走ってきた。

両手に真白いタオルを持っている。そのタオルを私の足に敷き入れた時、私は始めて足にけがしたことを意識した。冷たいタオルがきりきりした痛みを緩めた。

私は「ありがとう」と言いながら、自分の真赤な血が真白のタオルを汚すことが心配で、痛さを堪えてちょっと動いた。お婆さんがすぐ「動かないで、動かないで、このままでいいのよ！」といいながら「はやく、はやく」と家に向かって叫んだ。

お爺さんが今度は両手にソファマットのようなものを持って、急いで私のところに駆けて来た。今度は、そのマットを直接私の背中の下に敷いて、「地面が堅いですから、このマットのほうがたぶん気持ちいでしょう」と言った。私は同じように「ありがとう」と言いながら、血がマットに汚さないようにちょっと動いた。このとき、お婆さんがいつの間にか、ひとつの枕が手にしていた。その枕をそっと私の頭の下に敷いた。

遠いところからの、救急車のサイレンが響きながらだんだん近くなる。お爺さんが「もうちょっと我慢して、救急車がすぐ来る」と言って、壊れた自転車が道を塞がないようにちょっと横に移動した。

救急車が来る前に、知らない人、知らない自動車が私のそばを通った。みんなが声をかけ、「お手伝いしますか」と聞いて、お爺さんが「大丈夫です。救急車もうすぐ来る」と答えた。

ただの声かけ、何気ない会話、極普通なやりとりが、その時の痛さで横たわっている私にとって何よりの慰めに感じた。

救急車が来た。救助隊員が私を救急車に運んで、市内の病院に向かって走っていった。

幸い、骨折していなかったので、杖に頼って翌日退院して家に帰った。タクシーが私を乗せて事故の道を通った時、私は特に道端の家に注意して見た。玄関のところに普段全然気をつけない「平田」という名前が刻んであった。

家に帰って初めての一ヶ月、週ごとに近くの医院に通院することになった。事故前に名前も知らない近所の「吉田さん」が自家用車で私を医院に送迎をしてくれた。その時の感動が恥ずかしさも交えて今も心に残っている。

一ヶ月のあと、交換留学の期限も終わった。帰国する前に私は「平田さん」と「吉田さん」の家を訪ね、深く心からお礼を言った。

以上は前年「釣魚島」により日中関係が悪化した最中に、私が交換留学生として京都で経験したことであった。両国関係がどんなに曲折変遷をしても、民間の友好は本当に永遠であると感じた出来事だった。

日本で母国でも体験しなかった心を伴った行動の温かさであった。事故に遭うことがなかったら、知り得なかった。人との関わりの優しさだった。

初めてだが、永遠に忘れられないことである。こんな友好的な人々がいるからこそ、日中関係の行方も必ず、私の実感したように友好的な道に沿って進むだろう。

嵐山詩碑からの思い

何珊（南開大学）



今年の7月、学校の短期研修プログラムで京都の嵐山に行った。その日嵐山は雨に洗われ一段と鮮やかさを増していた。目標は周恩来総理の詩碑だったが案内地図を見てもあまり分からなかったのでもたもた通りかかったお爺さんに道を聞いた。それでも見つけることができずうろろしているとお差点の所で先程のお爺さんを見かけたので再び道を聞いたところ、「ここから真直ぐ歩いて右に石の階段を見たら登って周恩来総理の詩碑が見えますよ」ともう一度道を案内してもらった。お爺ちゃんが心配でわざわざ私達を待っていると気づき、本当に感動した。

私達は順調に詩碑を探し出した。木の影が大きな石碑を引き立たせ合っている。基は少しも磨き上げない大きな石で積み重ねられ、本体も磨き上げない一つの石で少し楕円形を呈している。正面には元中日友好協会の会長である廖承志が書いた周恩来総理の「雨中嵐山」が彫り刻まれている。詩曰く「雨中二次游嵐山，兩岸蒼松，夾着几株櫻。到尽处突见一山高，流出泉水绿如许，绕石照人。潇潇雨雾蒙浓，一线阳光穿云出，愈见姣妍。人间的万象真理，愈求愈模糊，一模糊中偶然见着一点光明：真愈觉姣妍」。周恩来総理は1917年9月から1919年4月にかけて日本に留学し、ことに最後の半年余は京都の友人宅に寄宿していた。この「雨中嵐山」の詩は、彼が帰国を前に嵐山を訪れて作ったものである。政治家というよりまだ青年として日本で新しい思想を知り、暗い世界の中で一点の光のような感動を受ける雰囲気を感じられる。

周恩来総理の詩碑は彼とゆかりの深い京都に1978年中日平和友好条約締結を記念し中国人と日本人の子々孫々までの友好の心を現す為に建立された。中日友好のシンボルとしてのこの碑は特別な外観や構造、豪華な彫刻工芸などはなく、質朴簡素である。この質素な石碑がまさに中日の民間交流を言いふらさないで静かに中日の友情を記録している。

歴史から見れば二十世紀五十年代には「民間が先行し、民をもって官を促す」という方針が提起されて以来中日貿易と文化交流のルートが切り開かれた。六十年代には漸進の積み重ねの方式で、中日関係を半官半民の時代へ推し進めた。七十年代には、両国人民の共同の努力のもとで、時機を失うことなく中日国交の正常化を推進し、両国人民の長年の願望を実現させた。中日民間の交流は中日関係に重要な役割を果たしていると言える。中日の人々は貿易だけでなく、いろいろな領域でこの友好的絆を深く結んでいると思っている。愛知大学現代中国学部は毎年だいたい2年生全員が第3セメスターの4ヶ月間、中国語の語学研修を中心として私の大学で現地教学プログラムを行う。このプログラムは私の大学と愛知大学との間に18年間継続されている。中日教育界においては前にも後にもあり得ないことであると思っている。

今年、私は本当に光栄なことに臨時職員として現地連絡事務室で働いている。このプログラムのおかげで、本当にいろいろなことを勉強した。毎日の業務の中で学生たちのクラス日誌や、ライフレポート、リアクショ

ンペーパーなどを読んで、学生たちが中国語の語学力のレベルを高めただけでなく、中国の社会や文化も肌で感じる事ができたと分かった。彼らの姿を見ていて、自分の日本語を学び始めた頃のことを思い出した。このプログラムに関わった先生や学生は皆一人一人の力で中日民間交流の絆を深くすることが出来ただろう。ただし、日本語と中国語を専門とする学生だけではなく、両国の人々みんなが能動的に積極的に交流する気持ちが非常に重要であると考えている。両国が過去を継承し未来を開拓して、子々孫々にわたり友好的に付き合えることを心から祈っている。

「近くて遠い国」

趙千慧（鄭州大学外語学院）



光陰矢のごとし、大学に入ってすでに三年が経ち、同時に日本語学習歴も三年目に入った。しかし、私はもともと日本語に興味があったわけではなく、むしろ日本語どころか、日本という国を毛嫌いし、日本人に対しても好感を持ったことは一度もなかった。そして、それは私だけではなく、私の家族全員がそうだった。

「日本語を専攻にするくらいなら、大学になんて入らないほうがいい！」

これは私の専攻を知った時の、母の言葉である。一時、私もそうしようかと思ったものだ。

だが、日本語を学んでいるうちに私の中で何かが確実に変わってきた。大学に入ってから勉強は楽しいことばかりではなく、つらいこともあったが、一つわかったことは、以前の私は本当の日本を何も知らず、知らないことに気が付かないままに誤解をしていたということだ。

しかし、なんの理由もなく日本に対して偏見を抱いていたというわけではない。子供の頃から、テレビドラマに夢中になっていた私はよくドラマの中の「鬼子」がそのまま日本人の姿だと思い込んでいたのだ。私と同じ経験をした人はこの中国に数えきれないほどいるだろう。

ある調査によると、中国では、7割の国民が日本に好意を寄せていないという。同時に日本でも9割の人が中国のことをよく思っていないようだ。原因は、以前の私のように相手のことをよく知らず、植え付けられたイメージのままに嫌っているところにあるのではないか。そして、そのイメージを植え付けている張本人がメディアである。

メディアの役割とは、中立な立場から事実を伝えることであり、その情報から、国民一人ひとりが自分なりの考えを持てばいい。ニュースの中で情報操作をしたり、悪因あるコメントを付け加えたりすることはニュースから客観性を失わせ、報道されているものの中から真実性がなくなっていく。残念なことに、両国ではこういう偏った報道が少なくない。メディアがメディア本来の報道姿勢を持つこと、これが中日関係改善のために是非必要なことだ。

そして何よりも大事なことは、メディアから離れた民間交流をもっと盛んに行うということである。

だが、その民間交流も中日関係の改善の足を引っ張っているという状況もある。近年、日本に旅行する観光客が大幅に増加しつつある。そのことは喜ばしいことなのだが、一方で、ポイ捨て、割り込み、汚い言葉遣いなど中国人旅行者の無作法な振舞いが目立ち、そのことに眉を顰める日本人も多いと聞く。日本は礼儀作法に厳しい国だ。日本に限らず、外国に行くなら、その前に相手国の文化や習慣は多少なりとも学んでおくべきだ。

今年ちょうど中国人民抗日戦争並びに世界反ファシズム戦争勝利70周年にあたる。戦争という悲しい歴史は両国の間では避けて通ることはできないが、それ以上に両国には長い交流の歴史がある。

反日感情が根強い中国だが、日本製品の優秀さは中国人の誰でも知っている。日本のアニメは中国でも人気が高く、アニメをきっかけに日本に興味を持つ若者も多い。そして、今や中国国内の多くの大学には日本語学部があり、そこでたくさんの学生が日本語を学んでいる。それらをきっかけにすればいろいろなテーマでの民間交流ができるはずだ。そして、草の根の交流を通じて、お互いの国の国民が相手をもっとよく知ることができれば、中日関係もますますよくなると思う。一人の力は弱くても、それが集まればきっと中日関係の改善に嵐を巻き起こすだろう。私はその民間交流の力を信じている。

民間交流と中日関係

宋改華（山西財經大学）



今、私は日本語科の三年生。大学に入学してから日本語の学習を始めた。はじめのうちは、日本語が全く分からなくて、いやになった。ひらがな、カタカナを覚えなくてはならない。中国語にない発音があつて難しい。もう嫌だ、日本語の学習をやめようと思ったことさえあつた。しかし、粘り強く学習を続けていると、少しずつ日本語がわかるようになり、おもしろくなった。そんな時、日本のアニメやドラマを見始めた。それは映像や画面がきれいで、内容もおもしろいと感じた。特に「ナルト」というアニメが一番好きである。これをきっかけに日本の文化や風俗に少しずつ興味を持つようになった。はじめは嫌いだった日本語もだんだん好きになってきた。こうして日本が大好きな女子大学生、私が誕生した。

このように日本について興味を持ち、日本語が好きになると、中日関係についても考えるようになった。確かに今の中日関係は良い。戦後最悪だと言われている。テレビやインターネットでは毎日のように悪化する中日関係のニュースばかり流れてくる。いったいどうなっているの。これから中日関係はどうなってしまうの。そんな心配ばかりの毎日だった。日本文化と日本語が好きな私にとって、これはとても悲しいことである。

しかし、問題があるということは、決して悪いことではない。今後中日両国が協力して一つ一つの問題を解決し、新たな友好関係を生み出すことができるからである。そのためには、中日両国はお互いの文化を理解し、誤解を解き、偏見を取り除かなくてはならない。

では、具体的にどうしたらよいのだろうか。まず、中日両国共に、自国の主張ばかりするのではなく、相手国の主張にも耳を傾けるべきである。相手国の主張をすべて受け入れることはできなくても、相手の立場を理解し、相手の意見に賛成できなくても、その意見について理解する努力は怠ってはならない。今まで、中日両国ともこれができなかったのではないのか。そのため、中日関係は日に日に悪化の一途をたどっていったと考えられる。それに輪をかけたのがメディアである。

もし、中日両国がお互いの誤解を解き、お互いの文化を尊重したら、両国の交流はますます広がり、日中関係も調和の取れたものとなり、民間交流もかつてないほどに盛んになるに違いない。中日友好の障害もなくなると思う。中日双方にとって国益につながることである。これは中日両国人民の希望である。

中国と日本が一衣帯水の隣国同士であることは永久に変わらない。そんな中で、中国の大学生として何ができるだろうか。何をしなくてはならないのだろうか。私は、日本語科の学生として、今後も日本語と日本文化を勉強し、中日友好の架け橋になれるように一生懸命頑張りたい。

そこで私は、具体的な計画を立てた。2022年には北京で冬季オリンピックが開催されることが決定した。中国にとっても、北京にとっても二度目のオリンピックである。私も、中国人として誇りに思う。北京オリンピックには世界各国から、選手や応援団が駆けつける。もちろん日本人の選手や応援団も大勢中国に来る。それはまさにスポーツと平和の祭典である。その時私は大学を卒業している。もしかしたら、日本留学から帰国しているかもしれない。私は日本語を学習した経験を生かして、北京オリンピックでは日本語通訳ボランティアになりたいと思う。北京に来た日本人がみんな満足して、帰国してくれたらいい。そしてその人たちが中国を好きになってくれて中日友好の架け橋になってくれることを望んでいる。こうして得られた人材は中日両国にとって何にも変えがたい宝物である。

また、オリンピックが終わった後、私はボランティアの経験を生かして、学校を経営したいと思う。日本人の留学生やビジネスマンには中国語を教え、中国人には日本語と日本文化を教える学校を経営したいのである。講師として、日本人留学生が日本語を教えたり、中国人の大学生が中国語を教えたりすることもあると思う。語学学習だけではなく、中日両国の若者たちの交流の場を提供できれば、草の根の民間交流も活発になるであろう。民間交流が活発になれば、政治・経済問題の解決の糸口が見つかるかもしれない。こうした活動を通じて、中国に理解のある日本人を大勢育てる一方、日本に理解のある中国人を社会に送り出せるのである。その卒業生の一人一人が将来の中日友好を担う人材として成長していくことを願っている。彼らもまた、何にも変えがたい宝物である。

このようにして私は中日民間交流を進めていきたい。日本と中国の友好的な関係に力を入れて平和の使者になりたい。これが私の夢である。その夢を実現させるために、今日も私は一生懸命机に向かって日本語を勉強している。

言葉を学ぶことを通して、中日両国の文化を理解し、共にアジアの美しい未来を築いて行こうではないか！

「中」と「日」の「道」

黄倩倩（合肥学院）



5000余年前、漢字が生まれ、中国にて書道の文化が始まる。西暦285年、漢字は日本に伝来し、日本も書道が広まる。2010年、書道の勉強のために、中国にある一人の女性が来た。2013年、私たちは彼女に書道を習った。

そして2015年、彼女は日本に帰国した。彼女は私たちの日本語の先生でした。

「先生は中国が好きですか」

「うん、好きですよ。」

「一番好きな文化はなんですか」

「書道ですね。」

私は、先生は中国に来た目的として書道の勉強に励むためということを知り、少々耳を疑った。どのような情熱を持って家族の反対も顧みず中国に来たのか。その時私には彼女の意図がわからなかったが、それでも一人に中国に来た彼女の勇気や情熱に対し、私は尊敬の念を抱いた。

ある授業で、私たちの先生は紙に二つの簡単な漢字「中」と「日」を書いた。簡単な漢字だが、何度も練習し、初めてきれいに書くことができるのだと先生が言った。

その二つの漢字を綺麗に書くために、私は何度も何度も練習した。机の上ですでにたくさんの紙が積み重ねたので、不注意のため、紙が何枚落ちた。私は屈んでその紙を拾い上げた時、急に何か気づいた。

そして私はその「日」を書いた紙を90度回転をさせ、「日」の真ん中の線を上下に伸ばした…どうなっただろう。そこに現れたのはもう一つの「中」であった。見慣れるものでも、違う角度から見れば、新しいものが発見する。

その「日」の真ん中から伸ばされた線は、まるで伸ばした両手のようではないか？両手を広げ、「日」は「中」になった。そして、両手で抱きしめれば、「中」は「日」になったのだ。

そう考えてると、私は「中日」の関係を考え直してみていた。もしその書いた「中」と「日」の漢字のイメージは、中国と日本のきずなのイメージと同じなら、両国はお互いに友好的な手を伸ばすれば、未来を抱きしめることができるのではないかと思っていた。

千年前、漢字が日本に伝来した時、この「中」と「日」のきずなが生まれたのではないだろうか。そして書道は中国と日本で盛んになると同時に「中」と「日」のきずなもさらに深くなってきたと思う。今日、私たちの日本人の先生は中日共有の書道によって、その忘れられたきずなを再び見せてくれた。その「中」と「日」のきずなも中国と日本のきずなだと思う。

それからの2年間、私たちにとってこの書道という文化は、ただの芸術という書法の美の道だけではない。私たちと先生が作る想いの道、中日の道でもある。

2015年、先生が日本に帰国した。

最後の授業、先生は私たちに向けて「道」という文字を書いた。その字に目を凝らすと、まるで本当の「道」が目の前に現れたように、一節の光が私の目の前から彼女の足下まで伸びていた。その瞬間、私は身にまとわりつくもの全て振り払われたかのように、先生と私たちの未来、中国と日本の未来を心から願っていた。

人間は、どんな時でも、未来の可能性を信じるべきではないだろうか。先の「中」と「日」の関係のように、中国と日本はきっとお互いにその見方を変えることで、同じ「道」で歩き続けることができると信じている。

送別会で初めて先生は「ありがとう、幸せ」と言いながら、涙が頬を伝う顔を見せた。最後に私たちはクラス全員で作ったアルバムと「中」「日」「道」という漢字をプレゼントとして先生に手渡した。

そのプレゼントの中には、私たちの共有の思い出と願いが含まれている。「中日」は同じ道で向かい合って歩み寄っていくという願い。

民間交流と中日関係

王 喆（華東師範大学）



「中国と日本はあんな関係になったのに、よく日本語を勉強する気になるね」と常におばさんに笑われている。さらに、幸い日本語院生になった時も、「日本語院生になったって、ちっとも役に立たないわよ」と皮肉を言われた。当時、私は何も言えなかった。

とても些細な話ではあるが、親世代でよくこんな話があるというのは、やはりあの戦争が原因であろう。また、中国人の多くが「日本人は信用できない」だとか「日本製を買わない」などと

ぼやいていたり怨んだりしているのをよく耳にするが、そのような認識をもつに至る理由は、中日の民間交流が少なく、きちんと理解し合えなかったからだと思う。

確かに、中日が国交を結んでから、中日関係は今や最悪の状態に陥っていると言っても過言ではない。しかしその一方、ここ数年、中日交流がますます盛んになり、「政冷経熱」とよく言われている。政治面は完全に政府間の話なので、我々にはとても勝手に評価できるものではないが、民間での交流は我々にとって、一番身近で、中日関係の改善に影響を与えることができるのではないだろうか。

思うに、今やまさに「政冷経熱」の最中といってもいいだろう。中日交流が盛んになるにつれて、留日学生が年々増え、日本に旅行したりするのも便利になった。今年の国慶節の時も、また大勢の中国人観光客が日本の各地を訪れたそうである。それどころか、中国での日系企業がだんだん増えていくにつれて、日本人留学生や会社員なども各地で見受けられるようになった。経済低迷や少子高齢化社会が進んだ日本にとっては、中国の消費力や労働力がとても大切であり、また、発展中の中国にとっては、先進国の日本に、経済・教育・伝統文化の伝承などの分野で、色々と学ぶことが必要とされているのであろう。そういった意味では、やはり政治関係と関わりなく、中日交流がますます緊密になってきたといえるのではないだろうか。

身近なことからも常にそう感じられる。特に、一番感動的だったのは、大学時代の同級生が日本人と結婚したことであった。その日はちょうど卒業式の日でもあり、とても印象的な一日だった。実はその同級生である彼女は元々日本語専攻ではなく、法律学科の学生であったが、ある日本人留学生の男性と出会い、付き合い始めたことで、また一年生として日本語学科に入ろうと決意した。二人は順調に卒業して結婚したので、お祝いの気持ちも含めて、やはり国際結婚は素晴らしいと言いたい。実を言うと、国際結婚というのはそれほど珍しいことではなく、ごく普通なことであるが、私はこのカップルを見て、「ああ、中日の架け橋なんだ」と思わず感心した。それがちょうど私が「愛新覚羅・溥傑伝」という本を読んで、大いに感動して泣かずにはいられなかった時であったからである。その本は偽満州国を背景とし、戦乱時代の溥傑と嵯峨浩二人の婚姻と運命を描いたものであり、二人が中日関係の複雑さにもかかわらず、万難を排し、一生を尽くして両国の架け橋となったという話であった。大げさかもしれないが、まさに国際結婚の模範であると思う。今や国際結婚は珍しくはないけれども、これらのごく普通のカップルがたくさんいるからこそ、今現在中日の架け橋ができていないのかとしみじみと感じた。

また、日本にも中国に関心のある人が大勢いるようだ。ウェイボー（中国版ツイッター）のホームページを開いたら、多くの日本人アイドルや中国在住の日本人が活躍している。山下智博などのウェイボーがとても人気らしい。ネット上だけではなく、民間の組織も少なくない。9月29日、ちょうど中日国交を結んだ43周年の記念日であるこの日に、私は上海日本学会の学術検討会を傍聴した。一番印象に残ったのは、白西紳一郎という有名人の話である。この人はまさに日本唯一の、生涯を以て中日友好事業に力を尽くした人と言える。五十年間にわたって六百回以上中国に来て、中国だけを訪問すると決意し、中国の発展を熱い目で見つめてきた。香港が中国に返還された時は香港へ、澳門返還の時も澳門へ、青蔵鉄道ができた時も直接西蔵へ行き、さらに、中国台湾の問題が解決できれば、車椅子に乗ってでも台湾へ行くつもりだと言う。台湾以外の中国各地を訪ねたそうである。それどころか、白西さんは中日青年交流のことを十分重視し、日本の中国人留学生を各方面で支えてくださった。胡錦濤総書記からも「白西さんは中国人の昔からの友人だ」と高く評価された。白西さんはまさに中日の架け橋と言ってもいいだろう。

中日両国友好のために、民間交流は実に大切なものだと私は信じている。素直な心を持って、お互いに理解し合うことを通じて、我々は微力ながらも中日友好に貢献できるのではないだろうか。

民間交流と中日関係

王宝玲（東華大学）



「『出て行け。中国から出て行け。』私はその店員さんのお爺さんに怒られて、お店から追い払われてしまいました。」目の前に座っている相互学習の相手は、話を進めるうちに目に涙を浮かべました。

夏休みに日本に短期留学し、その機会を利用して、以前からメールで相互学習していた渡辺さんと会いました。心の中の冷酷な日本人のイメージと違い、非常に親切なお爺さんだったので、当初の私は渡辺さんに対し好感を持っていました。

挨拶の後、渡辺さんは中国での自身の体験を語り始めました。「私は1940年に中国のハルピンに行かされ、そこで子供時代を過ごしたんです。」そう聞いた途端、私は驚き、ある疑問が頭に浮かびました。

「あの、その時期は日中戦争だったのではないですか。」私はあまり話題にしたくない歴史のことを慎重に口にしました。

答えは自分の想像通りで、「そう。だから私達日本人の子供と隣の中国人の子供は犬猿の仲で、毎日喧嘩していました。」というものでした。

子供だった渡辺さんは戦争に参加していないとは言え、この話を聞いた後、何だか彼を憎み嫌う気持ちが湧いてきました。戦争による体の傷は治っても、心の傷は治りません。

渡辺さんを全中国人の敵と見なすべきか、私個人の敵か。

私は戦争に関わった全日本人が嫌いである一方、渡辺さんは中国のことを好きでいてくれます。「東京は私の故郷ですが、ハルピンは第二の故郷です。しかし40年後、再度中国に踏み入ってみたら、よく罵られましてね。」

渡辺さんは万里の長城に登っている際、足を怪我してしまったそうです。周章狼狽しているところに、一人の女の子が現れ、助けてくれました。彼女はそばの店の店員でした。そして彼女は渡辺さんを店で休ませました。しかしその時、思いもよらないことが起きました。

長い年月が経ってしまい、中国語もすっかり忘れ、日本語でしかお礼を言えなかった渡辺さんは、戦争のせいで日本を敵視している店員のお爺さんに怒鳴られました。

「まるで子供の時の喧嘩みたいだな。私、中国人の親切さを感じたと同時に、中国人の日本への憎しみもひしひしと感じましたよ。」渡辺さんは苦笑いしました。

そんな境遇に遭った渡辺さんの顔を見ていると、私は彼を嫌う気持ちがなくなり、逆に気の毒に思いました。彼は戦争とは何の関係もなく、むしろ自分も被害者なのです。戦争のせいで故郷から追い出され、一家団欒もできず、自分の仲間達とも別れさせられ、新しい国で友達を作るどころか、逆に毎日喧嘩ばかりの日々を送っていました。無邪気な子供に何の罪があるの？何故このお爺さん、いや、多くの中国人は罪のない日本人を敵視して報復したいの？

やられたらやり返すのは果たして正しいのでしょうか。互いに傷つけ合うだけで、何の解決にもならず、何も残らず、何も生まれないのではないのでしょうか。

私は中国人は戦争の歴史を心に刻むべきですが、憎しみの対象はきちんと区分すべきだと思います。戦犯に恨みを抱くのは分かります。その一方、一般の何の罪もない兵士の家族を一視同仁に憎むべきではないでしょう。彼らも哀れなのではないでしょうか。

やはり、両国民は互いに民間交流しなければ両国の関係は改善できず、中国人の日本人への偏見も減らすことができません。

最近見た番組で、ある日本の建築家が中国人の家を改造するためにこの中国人と一緒に一日暮らしたいと申し出るシーンを見ました。最初は「家が狭いから不便だ。」などと言い訳して断っていた中国人は、この日本人の真摯な態度に負け、最後にはこの日本人を受け入れていました。

この貧乏な家族はわざわざ肉や魚を買い、建築家を心を込めてもてなしました。そして、奥さんは料理を作っている間、ずっとそばにいる建築家と話をしていました。

「中国語ではこれは『五花肉』といいます。」

「日本では『バラ肉』ですね。」

「『巴拉泥庖』（バラニク）？なにそれ。ワッハッハー。」

二人は具材の呼び方について話していました。炒めた肉の匂いが漂うと、部屋中の雰囲気も盛り上がってきました。

「中国では乾杯しないと兄弟になれないぞ。」食事の時、ご主人は一気にビールを飲み干しました。本気でこの日本人と親友になりたかったようです。

私は渡辺さんにこの番組のことを話し、現在の中国人と日本人の触れ合いの様子を自分の口から伝えたいです。少なくとも、自分ができることをすることで、人々に両国関係の改善への希望を持って欲しいです。そして相手の国のことを認め合い、歴史の壁を乗り越え、皆が互いに助け合いながら生活できるように努力します。

「今日、教えたい中国語は『中国欢迎你』です。」

「どんな意味ですか？」

「出ていけの反対で、中国は日本人を歓迎するという意味ですよ。」

「中国欢迎我。」先ほどまでずっと雲に覆われていたような渡辺さんの顔に、やっと笑みがこぼれました。